



俳諧叢句題叢

前編

夏



雜記夏月物類目錄

夏之上

四月初

五月

夏之二

夏之四

菘

白菘六

夏菘

單菘

青菘

菘子系

菘子七

菘子

子園子

僅仙

花摘八

花所生

羊躑躅

夏菘

夏花九

夏書

夏蘭

夏蘭

黃酒

古桑

凡柳

夏一

節十

松魚

夏秋十一

總夏十二

夏虎

牡丹十三

芍藥十五

燕子花十六

花黃十八

玉卷芍

題叢目錄

小絲
 八月雲
 八月雨
 八月晴
 八月夜
 八月風
 八月露
 八月霜
 八月雪
 八月冰
 八月水
 八月火
 八月土
 八月石
 八月木
 八月金
 八月鐵
 八月布
 八月紙
 八月草
 八月花
 八月果
 八月菜
 八月肉
 八月骨
 八月髓
 八月血
 八月精
 八月神
 八月魂
 八月魄
 八月志
 八月意
 八月心
 八月思
 八月慮
 八月智
 八月德
 八月行
 八月言
 八月動
 八月靜
 八月安
 八月危
 八月死
 八月生

六月 頁九
 水之頁
 一頁流
 富士諸
 古用
 水之頁
 祇園去
 轉馬代
 夏之日 頁二
 暑 頁十三
 交水 頁十
 嘉定之 頁十一
 小之文 頁十二
 暑 頁十三

炎天 頁四
 夕露
 扇 頁十八
 拭衣
 竹奴
 納涼 頁廿五
 賜井 頁廿九
 冷瓜
 冰飯
 秀需教
 揚梅
 日盛
 旱
 團扇 頁九
 日傘
 抱翁
 凡葉 頁廿七
 麻地流 頁廿九
 送瓜考
 冷為 頁卅
 菽粒
 李
 雨乞
 汗 頁廿
 簞
 蓑枕
 抄水
 心古
 冷汁
 干飯
 漆取
 林檎
 夕立 頁十五
 交雨 頁十六
 雲峰 頁十七
 汗拭
 竹婦人 頁廿一
 涼 頁廿一
 清水 頁廿八
 菊水
 水粉
 梅干
 枇杷
 白日紅

既中居て心の根をさすは力
 直なる持て楓の口より水
 枯かくと小川をさすは口より
 旅人もさすは口より水
 多れくと地はさすは口より水
 と是の志をさすは口より水
 秋より水は口より水
 明のこの心はさすは口より水
 木のさすは口より水
 白霞てはさすは口より水
 うはさすは口より水

力

岳 嶽
 葵 葵
 菊 也
 号 笠
 漫 漫
 維 啄
 我 我
 公 公
 休 祥
 希 言
 有 皇

名もさすは口より水
 梅 檀の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水
 弁 弁の口より水

礼

足 直
 着 之
 冥 之
 寛 之
 長 高
 梅 岸
 宗 瑞
 尋 村
 会 会
 藤 方
 標 方

題叢夏

又礼や舊ハ運ウ 警ハ白し
 大名此多ク入テコリ又礼
 又礼ハ子孫ハ老刀佩ル
 酒呑の徳登る也礼
 礼ハ子孫ハ老刀佩ル
 病人のうやゝ島や礼
 又礼院のモホウウウ
 昔々を茶毎に持テ又礼
 礼ハ子孫ハ老刀佩ル
 風され又礼ハ老刀佩ル
 心王下ふと礼ハ老刀佩ル

白 白 白 白 白 白 白 白
 川 斗 白 洪 几 白 白 白

又礼院のモホウウウ
 昔々を茶毎に持テ又礼
 礼ハ子孫ハ老刀佩ル
 風され又礼ハ老刀佩ル
 心王下ふと礼ハ老刀佩ル
 又礼院のモホウウウ
 昔々を茶毎に持テ又礼
 礼ハ子孫ハ老刀佩ル
 風され又礼ハ老刀佩ル
 心王下ふと礼ハ老刀佩ル

松 士 植 井 張 肩 成 会 会 会 会
 兄 幼 又 六 六 六 六 六 六 六 六

題叢夏

杞と瓜の各ハ守味トシ文礼
花久根つるね松そまのくらね
人中に旭さくらり文礼
夕に深ねうらハ淋しき文礼
梳人ハとハまぶさ文礼
妻ヤ其子子ヤ和子まろし船の案
志しけけ旭のうらり平文礼
つにね松とおそころり人
礼久てまきしけりり杜
吹くと文ハおれりり文礼
左身より吹きハ先に人礼

大阜
己二
今
岳轆
道亮
力居
養礼
祥亦
臣侯
魯隱
電旌

礼久ていてそよ人をさされり
更礼竹やうまのまのなま
白芥子と鈴くらま文礼
人らとくまのり文礼
吉まらくらんや花
若の島のほろりかとまら文礼
ねふて牡母咲り花種
松ハ世の子れま文礼
り灯を土居人おれり文礼
花久て女子れふく文礼
考のまら自らさけり文礼

陸琴
吾石
葵亭
考笠
一茶
菊也
之庵人
似藤
世竹
春耕
左文
省吾

題議是

少妻に墨引れたる初水
 秋夏や又八返に似し
 飛鳥のさそふ鳥さる初水
 道草のらぬさそふも初水
 初水て木渡らるよまえ水
 こととて見れはらり初水
 初水作しあまをぬり
 初水ふを海の子たふさる
 あらうらうらととえく初水
 初水そめつらうら初水
 初水そぬみしきり初水

平角 長高 眞々 瓦白 戸角 蓮室 井古 左邊 久感 香風

白市 白市晴か祭并にまのま
 白きよ交来はらりといま
 白きよ一雨くはむや取ん
 白む人の交来のさそふ
 巻の肌をまらり交来
 さそふはれぬはさそふ
 青簾 青簾や酒さそふさそふ
 青簾は花柄さそふさそふ
 瓜先をさそふはれさそふ
 青簾はれさそふはれさそふ
 青簾はれさそふはれさそふ

葵冷 芦渥 潮花 炎物 ノ且 之中人 白梅 会 葵片 会

題叢夏

筑戸祭

十日立て十日子らぬれを屋
麦五十九門川やや貴屋
くればや死の屋にきいり
まを屋路監人も侍りしん
馬帽子をに馬帽子を
まを屋にれ扱もけりし
くも子供てさうしをさこれ
常より入おたやしを屋
手之んたれえさるまを屋
親法師のふんつる平端
そ飛もるまを屋の端大教

吉川 道亮 一葉 殿中 柑翠 末迪 常天 今貫 弓逸 祐男 知唐

葵

小田のや飛戸あは端の尻
古端といはれて母まのまお知
呉竹に世に葵のまお知
下この下のまも葵のまお知
沖風を扱お知ま葵のま
おさけに葵のまお知の親
りやうけ葵のまお知の親
拾ひあけてるれ葵のまお知
あつらひて川原の流も心
頼南にまお知のまお知
人より心葵のまお知のまお知

麦泉 護物 梓吉 曉甚 葵太 宗茂 保吉 代青 魯徳 玄城 宗茂

絶

題兼夏

絶

宗茂

松魚

節志あるついで先や海の音
 活て来るまのけとるし初鰯
 板のり此必登人よ初鰯魚
 地を走るあつとあし鰯魚
 あふとあつとあし初鰯魚
 面白の事あつとあし初鰯魚
 とれてとあつとあし初鰯魚
 白うりや初鰯魚の脊又後節
 としとあつとあし初鰯魚
 初鰯魚下り後者の足初鰯魚
 足の下をばしとあつとあし初鰯魚

丹波 青瀝
 魚 餅
 合 覽甚
 合 白旗
 合 薺片
 合 角形
 保 舌
 以 足
 恒 丸

麦秋

題叢麦

その戸や人の志との初鰯魚
 うけまの周にむちる初鰯魚
 ちり餅とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚
 初鰯魚とあつとあし初鰯魚

標 出
 五 旋
 一 子
 道 亮
 一 葉
 一 葉
 一 葉
 一 葉
 一 葉
 一 葉
 一 葉

去先流ハたぐ落ハ流る如
弓持の筆たさきと其あし
麦刈のまにともくり去先
中へおれてたてはふや去先
砂村やまいた風うき笠のこ
目のあのみたきのこま 気
まきくぬんたきのまあし
仲りさる藪のりやまき 気
ま先うす下小洲の藪えき
筋遠に小村えきりまき 気
関ちの通れりしやまきあし

保吉
百助
麦二
士朗
恒丸
赤大
大舟
道彦
今
甚密
秀氣

牡丹

去先起出てたれハまきし
去先麻の辺に禁りけ
折壺に吹とまりりまき 気
氣あそり月と抱りり白牡丹
有あのうちまき鬼燃る牡丹
葉とくまきあを静るる牡丹
牡丹切て筆の裏へし又あ
ちりて落付れたつ厚んか
白きのややきして牡丹
まきりてち欄に牡丹
りた本の花脚りて厚んか

後
路人
白女
琴糸
浪
嵐谷
院甚
几菴
白権
甚お
今
莫右
今
大江丸

題兼長

良を添てつゝと見え牡母お
 君國にへてしつかけき牡母お
 りつゝおそれおろし白牡母
 朝風にちるや牡母もせり日
 花障を喰んとしたるほえお
 とらさりとて反はあつゝ牡母お
 平の春あつゝも嬉し牡母お
 花ハ平の菊もたさゝわ牡母お
 り着ては小きふ花の牡母お
 花ふつゝやそすれお牡母お
 おんといふ花さゝは牡母お

芳之
 華成
 公
 佐嶺
 展就
 一草
 乙二
 月居
 岳轆
 尺丈
 月記

ば取れ人きつゝはるんか
 久遠おろし牡母おハ重巻
 後りてゝゝ座の牡母お
 時人ときぬ教ひつゝ牡母
 とやくと牡母つゝとむ嵜の内
 常の教つゝ養つゝほえんか
 若れん尽しとて白牡母お
 つぎの装いとのつゝ牡母お
 牡母おんやせけすつゝめり
 咲出て心のつゝさる牡母お
 白牡母ちる時書けつゝりり

白

公
 松尾
 希言
 祿男
 士切
 遅力
 本僊
 業跪
 龜文
 成貞
 一醒

横町の地車動く牡子か
 不つらりと後ぬ牡子のひと糸
 海山のくしをさるぬ牡子か
 一輪の牡子残り世にたり
 又つらも又毎日の片らんか
 志つらき人にあつて牡子か
 草家殿の泪よりし牡子か
 あり流れて唇をきつし牡子
 牡子さうとみめてその糸をさるく
 多岐を押しつけて喉にらんか
 黄にさるぬより牡子のふはか

陸奥

共堂
 養乳
 菊岡
 蕉句
 言権
 養亭
 常笠
 高島
 麦洲
 菊也
 三人

白牡子咲て十ををりたれ白
 町人の孫よりり居らんか
 牡子ありと人いふもこの葉
 ちる花のよきふたる牡子か
 白牡子風を抱て暮れたり
 鈴りさげたる牡子に志松し
 碎きれく蝶のよき牡子か
 ちつとれたら弦つげら牡子か
 家やのよより白き牡子か
 牡子咲く依れ志を起したり
 んとあつて白き牡子の煮付て

女

志宇
 秋支
 卓池
 素耗
 碩布
 星絡
 居然
 五老
 舊頂
 招呂
 丙子

五三三三三

たのまれてめては沸き牡子か
 蝶ももふの臨り牡子畑
 子ひやをきけとに牡子安
 牡子咲と覚てきき安の衣
 白牡子様、の詠の及此日
 婿して基にきれた牡子か
 白のを大るにきる牡子か
 花といひ牡子もあつたうら
 いりて牡子もたぶらひらね
 芍薬に廿日の秋はよりり
 芍薬に佃戸つるる唐うら

下伎 蕨井
 尾花 三糸
 後以 画半
 衣以 柳序
 舞 其松
 世壽 汝南
 兼 菜隠
 大笄
 向権
 官又

芍 薬

又六代芍薬つるる心あか
 芍薬や鈴に踏うらりけ
 芍薬にたのしきうら
 芍薬やたひちるぬの小さつ
 芍薬や牙持うらりけ
 芍薬はいらぬるふも
 子とるらう中跡あり杜
 こらうしや道く一花く杜
 人々の原あこらし
 杜あ栲をさいて咲
 仍初に又ささうし杜

尾花 李叟
 下伎 尚心
 柳居
 曉甚
 夙
 栲

燕 子 花

題 養 長

白に人まじりてやうやうけり
字澄み交れりさめり杜
とくもあさし心の心や杜
杜あおんとおのふ花を
あすあす一答ららるるけり
杜あやうしよ花のりまじり
朝風やた今咲く杜
杜あまるとや書や甲一板
りさすにいつまてつる心杜
杜ああやうもさうりたり
杜あうらうを世を信るさ

白旗
保吉
吉茂
希言
謀道
存正
恒元
寒崖
成良
藤笠
三顧

朝のりハ歌も醒し杜
臣君を人さるるそ杜
くさりのうさぬさし杜
ふにたていおく飽れ杜
考の考言のうけたり杜
きりけや又もほけり杜
短考の花ハ咲り杜
投入てさるるそ杜
人についてまけけり杜
杜ああてハ人も来さり
生へ向けておのり杜

甘谷
可教里
一学
道亮
今
夢亭
養礼
魯隠
聖権
権劍
長高

杜若心や秋の空に咲きしる
 大庭の晴まやふらけり
 ありけのやまうと飛く杜若
 ありけり二人の杜若
 香よりてとる千池の杜若
 ありに來てふ白洲や杜若
 杜若酒呑みの尾 冬
 燕子花今さくふらけり
 杜若心は秋の杜若
 杜若白くも思ふれ
 うる香の影にえさく杜若

空松
 申高
 万和
 菊也
 武陵
 志宇
 護物
 子影
 頑布
 匪淺
 秋廣

晴くさけひさきふれぬ杜若
 冬風の秋くうく杜若
 舊帽子さきし女提り杜若
 秋のうらみふれぬ杜若
 血染の葉やさきよりふる
 るの秋の花にふる杜若
 杜若同かくさくも杜若
 盃のちみさきも杜若
 月のわくはほちりり杜若
 秋やけれるを春ふやふらけり
 樹のまへにぬける杜若

漫々
 秋電
 尼衣
 郁賀
 水尾
 芝心
 雲翼
 可森
 野揚
 玉光
 警電

頰叢夏

尊のつよの故のせれり杜若
 燕子花にらんと守るふ二つ
 まに竹 暖見たりふらけり
 赤土の流れるてふ命をさ
 君の代の物に遠よの杜若
 りにけりて暖見たりふらけり
 子をけりて暖見のふらけり
 留るの戸や日教やさく立葉
 と物にれ八月八分より花葉
 ありふりれまの鳥の花あり
 尊のそふ葉暖見下ふらけり

甲斐 才馬
浪石 榮如
下流 蓬呂
大和 杜口
斐 物氣人
戸 園更
戸 係吉
下流 月化
下流 東蹠
 暖見

玉光色蕉
 紫冠傘
 嬰 粟
 井教のふとむ文の芭蕉如
 いちそう平花のありを語らる
 老尾やんをえよまの物面白
 立葉に利れよとさる葉子のふ
 ちのちとちりし 倒りたり子美
 地蔵の冷おろしの登りけ
 白芥ふに疎てあるまのふらけり
 荒海をさるえてけしの暖見り
 陽をにゆるる葉をれ一葉如
 芥子れふて守るうらちのけりし
 芥子の花あるふ子今もあつね如

斐 才馬
浪石 榮如
下流 蓬呂
大和 杜口
斐 物氣人
戸 園更
戸 係吉
下流 月化
下流 東蹠
 暖見

題叢夏

何花もちる時なるの花
教を安んずるにのふえか
笑初るくしや遠昔指古そ
野や花の中のみし
くしの花華れふたひも動は
白くしにを雷のむくうら
花くしや打りいまきぶの如
白くしに肌をすきくう遊是
楳の灯にいつてまきやうのふ
まののまもくかたやうのふ
松風もさうく竹やうの花

菊也
三府人
文常
其成
本卯
谷即
阿量
茶味
李尺
祇鳴

昔の花
蠶豆花
豆の花
凡車
石藤
茨花

人よりも聖方咲りしのたりに
うま風たを所されてらるのふ
蝶に白くくまそら夏も花華
涙てするまのくまや豆の花
蝶れまむすまらうし凡車
いそまや流とまいそ及れれ
ふ茨古々の花に似る水
る純てまにまきり咲茨花
くくし茨の花垣邊まそ
朝くれ標くくく 茨花
花茨ふられ芥らまの花

漢
蝶
巴文
一庸
益村
公
保吉
養
力化

題叢表

負走も仕保ちるすも夏の花
 卯の花にまもるはくも新のふ
 うつこい風はまもれ花炭
 龍噴きう岸にひつて午花のふ
 吾中やそれとまわつてとよりふ
 裏つに垣乃るそくより美人ふ
 懐くも迷ふ笑ひ美人ふ
 くれくもさうりれや柔挽ふ
 卯の花中やゆゑの帯のふ
 卯の花や色をそとへ入ちのふ
 卯のふや打ての及の裏表

戸
 對
 守
 号
 岳
 為
 其
 可
 周
 廣
 向
 公

卯の花の華ハまきと天守が
 卯の花れりりちり風き小春が
 卯の花もまきと垣ゆふ男が
 卯の花を粉にけしつて花が
 卯の花の中うらやまの女の人
 いざこまき卯の花垣のあましか
 卯の花の卯辰がたつて枕をたせ
 卯の花や櫻々あふりすをまき
 卯の花やまきをけりるまき
 卯の花の咲くはを降はり

存
 酒
 士
 携
 業
 成
 完
 祥
 可
 公
 一

これわくくは皇曆やわくくは後
延きまればよりしるるるるる
ふゆくとそりけりるるるる
此大戸の敷く志あるるるる
とくくとけの成りぬるるる
戸にたまふふり来て鳴るるる
附下りる先へ来てみるるる
あしきくひりりりりりりり
傘のちんちんちんちんちん
そりくとそりるるるるるる
戸にくくとぬのきりるるる

存 亜
希 言
胆 丸
士 切
公
棋 道
八 風
柱 尺
棠 兆
樟 雲
長 心

親方のたのしみなるるるる
つれのちりりりりりりり
ふくろへ凡のはいふるるる
花をぬいぬをちいりるる
雲のきりりりりりりり
樟つて心そりるるるるる
ぬをを凡ふりやれりるる
秋風をそりるるるるるる
花の戸もきりるるるるる
肉にそりるるるるるる
嘴るるるるるるるるる

百 雲
成 炎
百 舞
菊 望
心 非
乙 二
公
常 笠
長 高
号 老
塊 翁

常盤木彦系

廻亦ハサシ志ヲ付ルヤ木下言
 碑ヲ杖テいろヤ木下言
 常盤木の茂るにいつて蘇
 南ちる木七下りの虫物
 とふは木の大きなる茂る
 松ちる木大にいつる茂る
 多る笑し松のふ茂る後の上
 乃中人鬼這出て松ふちる
 ぬふさん出て掃升の茂る
 色にふに相控し花
 人やそ十とせ余りや桐の花

東 貨僕
 下 斗固
 乙 二
 李 光
 藤 人
 藤 史
 護 物
 曉 甚
 保 吉

升彦系
桐の花

桐の花

おりいふの木の井さへ桐のふ
 花咲ぬ七度切し桐の木に
 きの洗よ襟に落る桐の花
 瓦枝の葉のさたる花
 先小柄登そその厚ふ
 花袖ふらうて屋の蓋
 袂々通を候ふ袖
 袖の花を尾目に来り
 袖の花に影く雲に
 袖の花やひつ咲ても
 控の花の色も

公 路人
 松 魚
 真 老
 白 心
 白 老
 白 老
 北 谷
 女 吉

まゝ山椒

白ひたるまゝ山椒や木の葉

如英 西子

根穀花

赤鴨未だ根穀のふのこほれり

廣 志順

柳花

柳花花ちる平揚花の心ちあ集

紅 改二

何事の敷れをろそん柳花

素 素嶠

葉庭に花をこぼたり柳花

柳 柳堂

柳の花のふをこぼる平柳花

一 翁

泥柳の志ぶくふと葉にり

漫 一茶

柳のふをこぼる葉と柳のひり

可 可布

泥村やあり花をこぼる葉

左 左弁

麦飯のころこ白く柳花

壺 壺中

繡毬花

小てまりや垣花あり今けて咲

白丁花

さうらの花や口角に白丁花

飛 一玲

玉も花はほろく成し白丁

表 班象

義 棧

世の中はさうらぬ義の棧

馬 逸

檜 桐花

あつたやう檜桐や口角に花

五 五郎

志ゆら花をこぼる葉

葉 葉

不遠言肌咲き多くしゆら

葉 葉九

花 茄子

あすもろん初花茄子

乃 乃彦

花茄子はれらも葉のひら

無 無齋

初 茄子

うらまはさる葉のまを初茄子

貞 貞佐

葉へ花を移れり初茄子

吐 吐

初茄子は花をこぼる葉

尾 壽心

題義定

子規のやうな世の心の中
子規あ風りよまきのこの家
兄と妹にへえとぬる時を
この節と人もまうん子規
ちりくとんりりやお上時を
ちやわりのま本とちりて子規
短衣ハとて鴉（郭）に
子規まに下臨ハちりり
こゝろにわりのあし子規
松折も妹（さう）に郭（に）
瘦骨丸肉喰ハに素（子）規

左琴
木僊
道憐
成兵
会
会
喜年
完素
会
柳也
浪

子規ちるぬんをそぬれりせ
君う代のやとてさしれや子規
時をわりの抱たるまません
子規天の川風打とれあ
のきとちりりんあさり
まうんとさうり雲と郭（に）
まうまうぬや井の明る
時を屋のれとえぬるお松お
奇ハ人によろしく月とちれ
地ふりてわてまをち時を
あつありくまれハ人出白

為三
会
会
可親里
会
会
秀成
祥来
車大
鬼子
宗志

題叢夏

りかたり習れなまて子規
子規吳越の心とけけり
り集まるとして候るそ子規
子規四りれ心の言うそ凡
子規市に十心男と婦し然
子規それとて見れ心の境
百りしていれ候ん子規
色りもあつてのそち子規
そりれいれとて見れ心の境
新とちうそてそのそち
規とちうりて約言の子規

今 塊 翁
長 高
今 孝 卿
玉 屑
梅 樹
今 椿 堂
蕉 庵
蕉 白

性てぬる候もあまきし子規
吟そちとて見れ心の境
ちうそのとて見れ心の境
海へゆき候るそり子規
よるくのあつて見れ子規
新より候より見れ子規
造あつて見れ子規
木のなりとて見れ子規
降るい人のたつて見れ子規
手とれと書とて見れ子規
時と見たりとて見れ子規

電 燈
今 号 笠
今 美 亭
今 寛 松
今 垂 度
今 然 心 可
今 妙 女

吟時を打めく藤葉々子規
 吟よの月もよおはさし時を
 子規夢て夢うふの一女か
 夕る此やととのいて子規
 子も木も眼にるしじ時子規
 子規るくとおれんか友の元
 出ておけん今よりおれ子規
 部云一人の夢をいぢおさるり
 子規世八ふとんかおさるり
 子規人かおそぬ言のつ
 きてんやあはれを打つ子規

武陵
 松葉 加美
 季有 舞
 嵐介
 公 葵
 馬仙
 二人
 護物
 志半 女
 梅阿

吟の詠らえぬやうの時を
 子規秋より似るおさるり
 時をあるの下のなるおの心
 横むらわおその初言の子規
 花よりをさしてたけたり子規
 一々一々一子規心移
 朝りのをいぢぬさし子規
 子も木もをさるの春や子規
 子規りおさるり人のと
 岸にさるのさるる部云
 子規ありて端らさるる言

井眉
 其裳
 万和
 女 女
 心
 方明
 立志
 漫
 居然
 秋峯

子規 嵐の中へに家二ツ
 壺の戸をこしておれは子規
 花のちるに似てを言はる規
 鳥子を思ふ規を言ふ規
 花のけしにまの尖る子規
 ひりしよりまのふくして子規
 この中へこせを花して時を
 子規 春のころに花に
 子規 雪に七千ふりふり
 時を休めあちち人床し
 子規 星を織のおりたり

後 壺 其 鶺鴒 湖 大和 後 樹 翠 河 菊 也 句 考 松 雲

子規 海に心身をひくか
 子規 短くおれよ小一年
 子規 牙をわするらんはあれと子規
 子規 罷居とてしにちる規
 佛 さらあさるよりぬ子規
 子規 たちのこいおれりり 協
 子規 吟や江上樹を 葛
 子規 瓦を新しきれぬ規
 あさるしよとを言ふぬと子規
 時を初言にたぬぬと規
 子規 二をり中へに心ある

双 鳥 末 院 不 精 百 非 仏 風 林 園 孤 心 其 圭 石 芳 壺 石 橋 丸

題 叢 長

うんこちやうくさむ先へせりりり
うんこちやうくもたれはれはれはれ
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち

為三
祥糸
不寒
左亮
全
月見
志野
岳松
雪権
号笠
桂棠

うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち
うんこちやうくやうなれりんこち

袁丁
菱亭
寒松
長高
匪侯
孝剛
一葉
女汝
女志
卓池
護物

三猿の癖に成りりんて
白雲の清らきちやうけんて
久しき家あるまにまらに
身ひつりのまはらうんて
心んハ地といふらんこ
りんてまはらにんまらり
人よりんこちやいれんて
洞に書こておてんて
りんてまらちい水のむに
えこまら何のちまらこれ
うまらハ何のまらこれ

林洞
女
其
柑
子
木
下
馬
池
村
之
秋
光

吟下子を印へうつれんて
瘦たそそ強ううりんて
久しきまらまらてすむ
大名も何よてまらんて
世を捨るこちれんて
久しきまらまら人ハ
顔うーやみまらりの
而強を足てもまらんて
之りまら代領政境や
人の来て断絶まら
りんてまらいんて

何丸
壺半
一
井古
橋
沙
海也
可
存
底
本
老

題叢友

鶴

割草鳥

画屏の下のたもあそびうんてり
 うんてり井の古きたををま
 世の中のをに、疎りんてり
 りんてりおまのいふて、まうしき
 ころころ此初言うもまうんてり
 方圓を二眼物にあらて氣之
 菱の白鶴の負えりまう風
 菱のやゆに物なは勢の音
 此より外に柳にあら子
 隠家い友とまよまのり子
 り子身をえんまの解之

之去
 白蟬
 一風
 左弁
 全
 白旗
 序人
 竹枝
 白旗
 菱占
 八咫

白鳥と誰やいふぬり子
 菱のまの今よりぬり子
 かなんも地故まのやり子
 苗囀ふまのらんやまのり
 杖にすの竹の文をり子
 うぶまのりてあまのり子
 あれ中に権をもまのり子
 り子子ののんやんまのり子
 ちるまのあまはまのり子

踏石
 一草
 左巻
 全
 直麦
 女志守
 胡準
 棋翠
 可友
 去噴

題叢夏

葭 割

よしかりや子刈 笛も切らふらん
 よしかりや森堂て夏も居たか
 よしかりや痺を足に赤く画点
 よしかりやけをんに吹きしん
 よしかりやけをんに吹きしん
 鷹に赤くしりたれり 堀延
 堀鷹やるれもあふく風まらり
 郊の花のちりしれり 堀延
 夕風や水き湾の腰をうら
 夕き湾のこぼりけり 堀延
 夕き湾の人をふりまらり

保吉
 鷹丸
 芳之
 祖風
 白境
 宗漢
 後物
 基村
 稗堂
 寛兆

鷹 入 樹

養 鸞

枝 垣

暮

蛭 蚓 出 蟪

まき湾のそりまらり せつ
 まき湾のそりまらり せつ
 風際の手をうらりて 枝垣
 まき垣かきやえまらり 暮
 夕き垣かきやえまらり 暮
 そく退て竹垣をせり 暮
 蟪そく退て竹垣をせり 暮
 蛭そく退て竹垣をせり 暮
 蟪そく退て竹垣をせり 暮
 蛭そく退て竹垣をせり 暮

長吉
 五光
 保吉
 魯有
 都崔
 樗堂
 于潜
 重弘
 松子
 浮流
 南畝

蛭 蚓 出 蟪

犒牛世にあり甲斐にうつくし
 伊勢の家牛のふれり犒牛
 中ノハミミ必存れりうり
 花多れ庭ふらんうり
 築ぬいて柱てやうを犒牛
 人うを廻もあらんうり
 家牛の枝れは遠く犒牛
 うりうりゆる方角を志すれ
 田畑より一匹よりうり
 乳畜や定家作のうり
 うりうり畜の志すうり

有篁
 士初
 支輪
 樗雲
 吉成
 年ん
 吉平
 一平
 石亮
 寺岡
 志郷

乳畜のころはうりうり
 和風や一匹動くうり
 見まうして角を出り犒牛
 いなりや角ありと犒牛
 まさしむ母れんうり
 うりうり産て亡れぬ犒牛
 方のまき花り大角や犒牛
 田にふれやのまのじや犒牛
 りくして産くもうり
 犒牛危い事うり
 犒牛それも産くうり

一糸
 養亭
 土斐
 塊翁
 蕉白
 尾全
 棟雲
 彦人
 公
 紀逸
 女
 志宇

てくまをりんとて焼いり
 小口そふつたさうわ場牛
 端まそれたのちかもすけり
 干葉ももくきありあり端牛
 角あつハせれむさうさうり
 家たけの家はやすけやうさうり
 とふそれらへて見れらうさうり
 白たれに角さうれらうさうり
 柴折し夕アも信んさうり
 こつさうりらうさうれらうさうり
 遠生ののりく鼎いさうりさうり

快黄
 文角
 有斐
 南溟
 方文
 志恩
 足亮
 必家
 夙也
 李东
 卜感

抽 埏

森すのやもつれくの端牛
 折れくいの遠いより端牛
 家世をも斯う送りたさうり
 妻年の序ももさうりさうり
 後たははつて見せんさうり
 うさうりさうりと丸き包み知
 己らけ見くさうりれらうり
 何とてさうりものやちあうり
 ちうちのありさうりさうり
 折れたら後天もす下埏
 抄のなれ免ゆつちのさうり

古亮
 支白
 李尺
 付柱
 下口
 可竹
 可逸
 南皮
 文角
 栗菰
 旭如

題叢長

ちかみん 丑 秋にのちるや竿の光
伊豫女 花 明
 いそとまきんもあつたまのい
下弦 求 一
 地 元 挽
 地 の 元 挽 け し 羨 け 元
 地 元 挽 羨 甚

俳諧普及白題兼夏中

桂五右衛門輯

五 力

孫毛龜の遠にふるみりか	白 旗
一りれるに名をうけみりか	松 尾
夕白のねえつてふるみりか	士 郎
水まハ花の巻のふりりか	升 六
猪にハ越られーみりりか	音 三
深山木の庭に水すむ舞りか	号 笠
り先にちれ控てふるみりか	三 海 人
年のちと鳴るみりりか 深 馬	菊 也
杞きくのふみりりか 八 巻 原	但 号 黄 貫

題兼夏

曾 蔭

多女名を言ふ人々も又日
 小水のあやめを走る白ひか
 竹極やさしく切れあやめ子
 胸雀にあやめえせうえあやめ
 親の手に小浪のうらあやめか
 戸ぬれかき子の刺さるあやめか
 溢一舟入るともあやめあ
 山越に紅を押さるあやめか
 花いろくもあやめあ
 晴そよ風の空色うらあやめか
 あやめ名をとりけり

下流

梅史
 薺古
 長翠
 築瓦
 吉徳
 乙二
 一第
 素剛
 素繁
 魯隠
 申高

曾 蔭

旅人の笠にやうやあやめ子
 おりそめて切居りあやめ子
 ころれはほくのあやめか
 短かを繋て接りあやめ子
 白きのをく修うてあやめか
 徳うらもあやめか
 世の中をさうあやめか
 引かてりあやめか
 長くと脈にけりあやめか
 川岸に初花これあやめか
 花売のより磨けりあやめか

下流

電権
 照溪
 井眉
 志宇
 七介海
 琴
 石鏡
 鴨磯
 白権
 力辰
 蕉白

題 叢 夷

新舊唐

吳升の代はと申せざる唐唐
 女はありてはまのそあやめま
 存きてあやめしは新唐か
 新あやめ市に半くはりあり
 新のそとふあやめはあやめ
 新あやめこれや一りた忘る
 仮初れ新あやめは白のそ
 折のほあやめは白の折端か
 あやめ書きて折起るは新唐し
 世のそは瓦とてん新あやめ
 筆にふははかるそと新あやめ

桂堂
 流海
 系更
 白権
 保吉
 全
 一醒
 成災
 完泰
 一草

新舊唐

又六の折にふとる新あやめ
 よまよりま家もあやめは唐か
 芦の下の仮孫まは新あやめ
 あやめはそとりたは金屋に
 さは浪のそま新あやめは
 ふまあやめを折るは新あやめ
 世とては折ありは新あやめ
 さうふ折や新あやめは唐か
 陽あやめは新あやめは唐か
 はらふ折に金と折のそまは
 居風そにふらも折ふあやめ

志宇
 元阿
 金堤
 梅子
 三霞
 白権
 全
 保吉
 右範
 権阿

題叢夏

首膏刀 君の代のたりにしやや刀か 独坐 見推

為膏步 是も歩道の心はゆるし 又 明

柔玉 君の代や下地すれても不物 保吉

柔玉の下の外下はより多し 紫桂

印地中 懐きうハ親のんそ下地中 貞佐

百煉鏡 棟よりて流されたり又り刀 葵左

糍 すしこ中男のほしく造糍 全

いより大糍もくす大糍湯か 保吉

又より白に括て見たる糍か 成員

美より大踏きもあれ筈 糍 士

は取やむりかうる大糍糍 全

妹 是れいともほしく糍か 書成

筈糍一り糍の心地すし 成員

白漏に壺よりきたり糍糍 乙二

投込て見たる家之筈糍 茶乳

音色あるすの中糍の糍使 菊也

壺糍乳母のなめ身す中 号笠

拍餅

粒粒小改もろろし十園子
馳走ふるまふるち志ん粒小
夕粒斗の抱ひに好し
石女のむよくくふや拍餅
懐兄や懐さ母のまきり
源氏画や武末の懐糸の
やさき〜ふりこたる懐糸
おの〜とふに足てり懐糸
まろ竹子規おくの存り
君の代の片味方ド懐糸
板りの是も久〜まの存り

旦
林間
女
藁山
柳九
保吉
八
張六
井六
木
鹿

割掛兜

ふりもも盛て懐の光か
桐畑の縁干らんるの存り
白雲八盛て北山の懐糸
集込の子れの存り松の中
掃場へ来てとらんる懐
陣百の中になんり初懐
〜大遊孤獨子〜む世か
〜世〜と古〜もま〜兜
〜〜も〜し〜る〜兜
百子下見志るね〜も忘学
戸火費て柔源を〜行〜

鳥
其
松
有
同
披
子
又
虎

題義五友

菜子摘

菜
日

丹波

〇五六

石巻翁

花且見

美萩刈

蓬春系

蓬字交

蓬

むすふに石巻翁白おくれは

石巻や隣の花も葉淡時

石巻をよぶ字よりて屋の境

石巻や水のれもれいふま

ろいふ平かつ近なり其具是

世のあやめやとてひらふふ

澄入るぬ里のふらふふ

瘦うの扱こまへ喰ねを食

鶯の危堂れまや美萩刈

美萩刈 石巻の淡雪の水新

よとこしとまぬ蓬の花まか

浮蓬に魚あふくちりく

池の蓬花を浮葉の風情か

花ハハ風登てり大蓬ハハ

蓬咲ていやまふかやうり

月ヶ入や浮葉をらん蓬足舟

際草

若松

二人

白流

脱甚

護物

李甚

七有

野牛

可磨

乃老

定右

周更

乃解

几甚

薺左

花縣

蝶美

月明

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

白流

蓬葉長

藤花

白蓮のそなたをよめそりか
 公蓮や根のゆるれつたは
 蝶をにちやうれおん蓮の花
 公をに咽こらじ蓮の花
 蓮とよも笑てあより卵はあらし
 白蓮の一端笑ぬ端の中
 揉こふと枕をれり蓮の花
 蓮のまやをうりてり花より
 藤の花や序をれりもす心
 乃辺の刈藤花さくや花言
 藤の花やあつたに風さく

柑翠
 沙生
 寿翁
 釣魚
 白光
 東嶽
 藤左
 慶如
 愛麻
 草村
 今
 白雄

題叢夏

その花に吸着る人か
 その花や川に流るる
 引ひたは藤の花のさくま
 こころは押りりりり藤の子
 その花に夕風そよそよ
 その花に挿ては松よ余
 その花やさるりかきり
 此れ花やまにりたれと
 ままそ花にさむらやま
 村やや藤さくく花ひらく
 その花を笑ハ笑たり

軍
 慶
 蝶
 松
 余
 藤
 白
 藤
 一
 花

百合

雪の子もさしくと花の花
 水青を夏風情あり百合心
 心ゆりや青くお花葉の立派
 心ゆりや齒采の房よりつ咲
 中花夏の衣をよほん心路か
 甲り咲てお中の花を帯けり
 梳篦やのゆりうつく天守か
 さゆりの花のそよよ伏流か
 有るをさしお色を大吹る人
 心通る花心のうささをゆり花
 谷をたつて残るゆり花

推已
 女子代
 薺左
 白権
 士郎
 棠兆
 成貞
 左亮
 全
 奇剛
 素迪

お藍花

赤ゆりや口ぬてある里の
 暑がりや指もさくれおの
 男はなつませよさしおのふ
 あらうれきてつりもおのふ
 おつむやおに池の界うら
 お花つむしお花をさるお
 忘草の花はさしも咲るり
 久風に交え忘草うこふり
 足根をさるあつむお忘草
 家の株の莞子咲ゆり心
 ちもつげやれお花の色

寛松
 女子代
 石嗽
 其管
 丈方
 尺丈
 系更
 猿左
 可親
 魚文
 吉
 吉岸

題叢夏

忘草
 萱草
 下毛花

夏 金銀花 夏 菊

夏 金銀花
 夏 菊
 夏の菊の沖極凡ゆる春歌か
 夏菊の香や浮世を流く嘆
 とくもろくもれはれや夏菊の葉
 夏菊の葉に風流うけに嘆はる
 夏菊や秋をこゝ葉の輝きて
 夏菊にりぬき葉流たかたり
 夏菊の凡ゆるさわたり嘆はる
 夏菊ふやふに嘆はる水流し
 夏菊ふやふに嘆はる花の末
 夏菊ふやふに嘆はる花の末

右 竹
 百 竹
 光 縣
 恒 丸
 棠 兆
 平 角
 考 笠
 瑞 弓
 柳 尾
 院 甚
 百 明

紫陽花

紫陽花
 紫陽花や椽みどりし流美梳
 紫陽花やれにふむふあえ
 紫陽花のすきりあふる蒼り丸
 紫陽花や折れてむのさる丸
 紫陽花やうきうき流の流り丸
 紫陽花や杉の松か風流たき
 紫陽花や色尺さより七小所
 紫陽花やれふや笑可き梳
 紫陽花はれを流くの化粧丸
 紫陽花や夏今よりそのまき
 紫陽花をわけてわくやそ丸甚

栗 文
 尾 燈
 全
 保 吉
 又 巖
 恒 丸
 雪 萬
 成 員
 女 白 柳
 左 差
 素 葉

夏 紫陽花

瞿
麦

出陽春のやうなまゝ交裁場
 出陽春のやうなまゝ交裁場
 出陽春の花にたゞる个像る
 出陽春のまゝにたゞる个像る
 出陽春にうつりまゝをたゞる
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る

復物
 北原
 新秀
 松江
 里磨
 存正
 恒丸
 華次
 成英
 今
 昔之

出陽春のやうなまゝ交裁場
 出陽春のやうなまゝ交裁場
 出陽春の花にたゞる个像る
 出陽春のまゝにたゞる个像る
 出陽春にうつりまゝをたゞる
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る
 出子のまゝにたゞる个像る

祥永
 可教堂
 一草
 道亮
 今
 夢多
 横雲
 常笠
 三浦人
 女志守
 梅洞

題藁

紫胡
柔夷
藤美
青梅

心路の杖にけりたつていらま
岩を風や旅人芳ていらと管
西りらん漢ハ柔胡の心よりハ
柔の夷に斤積降る娘ハハ
夏の夷や杉の川にうしろの空
古梅は茂る千本の板石
古梅に眉をうつせり美人ハ
梅熟は折にふれたる是ハハ
古梅や魁も吹きたるはハハ
古梅をくそてわくハハハハ
茂る古梅は茂るあり豊の梅

覽
尺
全
一
凡
樹
凡
狂
我
石
集
去
辰

南天花

棠花

瘦梅はより平三もより
菊々の花のこぼれは是ハハハ
菊々の花に花や板付彫
樹の棠や菊々の花のちりこ
棠の花赤くハハハハハ
夕風や昔をいさる棠の花
棠ありとハハハハハハハハ
秋の棠にちる昔にたりハハハハ
棠の棠にちる昔にたりハハハハ
棠の棠にちる昔にたりハハハハ
棠の棠にちる昔にたりハハハハ

一
石
可
馬
存
尺
道
積
吳
木
末

題叢夏

花 檣

長白に遠記をうけふ松栂
花栂栂干や口不枚麴子
先子り花栂に碑位位
栂や枕子身の杉人見え
栂や月夜とをれは浮せり
栂の蒼むくをまのむく
栂のひくくある白く
夏をまじや花栂の白の坪
栂や子る見たり女多遠
栂や白灰の月夜並とる
栂のひくくは栂の栂

三道人
栂枝
白栂
保吉
浙江
乙二
奇測
号竺
竺為
碓台
米光

檣

花栂をうけふ白く
花栂の足とるまの栂
村白や足りけきま花栂
入のそと咲や白も花栂
夏の中栂立たり白栂
心多の乳人見たり白栂
とう見ても夕暮のそ白あり
花栂と一の斤羽のそ白あり
心栂子の花ありく咲たり
とうとうの心栂子の白あり
とうとうの花子多癖もたたり

栂枝
燒甚
白栂
甘谷
月居
乳身
杖枝
星潘
浮石
爪蓮
以是

くらやしの花やあはし婢女泣を
 口やしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白

護物
 床人
 了年
 氷水
 曉葉
 薺左
 若木
 有明
 又明
 成員

くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白
 くらやしの花やあはし婢女泣を
 くらやしの笑ころしきり門の白

天文
 道亮
 岳輪
 唐人
 壺伯
 井眉
 都勢
 紀透
 鳥頂
 雜咏
 竹根

田 植

田一枚子を花にまきつて雨にふる
 老運のりり終るりりかきれを
 晴道やゆつりあやうる運に
 子花舟舟ふて産の産来か
 隣田のりりてひく子花か
 白雲の个子れうる子花か
 子花よりほのほかも女まより
 ちてたされ控しもあつる子花か
 松のりを汎ひ出ぬる田植か
 びりてりりり田植か
 絵はて歸る田植の男か

奇例
 寛松
 白雲
 浪舟
 唯平
 正阿
 幽喃
 素樸
 今
 華村

木のやや松をよにまきつて田植か
 娘やうに白きてまきつて田植か
 志代をーや田植か
 一枚のりりて田植か
 植てまきつて田植か
 こらむりり田植か
 める星の敷を田植か
 と陰へまのりり田植か
 登れ子の田植か
 植てまきつて田植か
 侍にまきつて田植か

白樺
 諸九
 保吉
 吹丸
 土
 今
 今
 芳之
 樗也
 芳之
 三

題 叢 長

植つけたりりよの田とたうあうり
コヤくと植て去りり田一板
吸あや田植のあまの板一
いせうつあそ田植の古
あまのあうんに田植く
うさててあまのあう
あまのあうんに田植く
人もう植ていんたるい田
田を植て風の戸にと来たり
丁あまのあうに多くて田植
りあまのあうに田植く

大阜
道彦
全
等光
芳剛
身隠
蕉白
武陵
号ひま
長高
座来

田植

道端へあまのあうに田植く
戸にと植てあまのあうに田植く
松あまのあうに田植く
帆のあまのあうに田植く
あまのあうに田植く
田を植てあまのあうに田植く
あまのあうに田植く
あまのあうに田植く
あまのあうに田植く
あまのあうに田植く

植彦
卓池
釣翁
山人
共柳
郁契
木容
丘袋
又雀
豊右
徳吉

題義百反

蟬初声

危の子を時ふらふつは桂女水
 田植女のころひてあつる成りり
 けり 殿の早乙女をとりて見に如
 田植女は嫁に松をとりてまきり
 子乙女に祀をせしむるありてし
 子乙女はあはれの世も及ぬくし
 水子妙子に女をとりてまきり
 子乙女や若くはまきりてまきり
 子乙女の笠やく柳と柳
 子乙女や登りてまきりてまきり
 初蟬や肌鏡照れは花てり

瓜 松葉 一葉 白葉 左葉 養地 大丸丸 保岩 燒甚 瓜

蟬

初蟬や日だれはここのや蟬
 初蟬や立家くはまきりて
 初蟬や又若のまきりて
 初蟬のまきりてあはれ
 初蟬や口くしの花はちりて
 初蟬まきりてあはれ
 凡そ初蟬に吸れて一本か
 蟬のまきりてあはれ
 まきりてあはれ
 中りのまきりてあはれ
 初蟬やまきりてあはれ

瓜 梅 燒 松 梅 燒 其 李 燒 凡 燒 幾 燒 燒 燒

題叢長

松の木やうろく六粒うろく蜂の鳴
蜂のうろく魚送りゆり縄をか
鳴蜂や浮世を風う様の本
鳴やまは鳴蜂死んでえまら
うろく十ヶのやや或松の蜂の
鳴中にまらうろく蜂のひつわ
松のうろくハ蜂うろく木法
盤にきてうろくハうろく蜂の
蜂のうろく新にうろくハうろく
蜂うろくやうろく鳥をうろく
人うろく蜂ハ中庭と名うろくハや

成員 女 三 勸 士 角 祐 存 斗 保 印
員 子 三 士 角 祐 存 斗 保 印

うろくまら蜂も浮世れこの家
蜂うろくうろく鳴てはうろく
蜂うろくや井戸原のひり世は
蜂うろくやうろく鳥うろく強の
そむいて不ひうろく蜂の飛
や蜂のうろくハうろく縄 籠
世うろく木法のうろくや蜂の
蜂うろく出やうろく鳥うろく
蜂うろくうろくハうろく蜂の
葉うろくうろく世うろくハの
蜂うろく木うろくハうろく

公 祥 可 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公
公 祥 可 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公

坂

氣のうつる木をかきすくは神のつ
古井戸や坂にそよ風の音とじ
と風に坂の流りし中川が
それつと起て坂を焼荒らる
舟楫下ちやあそびも業やあそ
び代て坂のあそびききたり
さし入や人をとすまゝ坂の人
玉の粒をたそや焼けてつ坂の
坂の中へ松をこぼるる日あか
よし田やの坂にそよ風の音と
坂のつとをのふとよかる音か

古井
草お
今
几華
二柳
戸旋
保吉
南明
松尾
大治丸
松尾

〇七七

題叢夏

坂のりや神人の足にぬりさし
坂の中へ松をこぼるる日あか
よし田やの坂にそよ風の音と
坂のつとをのふとよかる音か
坂のあそびのあそびききたり
さし入や人をとすまゝ坂の人
玉の粒をたそや焼けてつ坂の
坂の中へ松をこぼるる日あか
よし田やの坂にそよ風の音と
坂のつとをのふとよかる音か

古井
草お
今
几華
二柳
戸旋
保吉
南明
松尾
大治丸
松尾

故のまや平撫さる身の時大しき
 故のつづらにさしこむ松入表は
 青の紙の豆磨りぬりの最故水
 さら大故や言より出てやまを
 故のつやまより起る身の時
 風筋にま枝まは平故もつん
 故に携るりやまをさる辭さる
 又香やつらぬ故のて月にはさる
 庭松に酒吹て故をたしめん
 ありつ故をまや平撫さる世故を
 度ふさつらぬ人も故にさるさる

眞く
 平角
 一茶
 平角
 石浜
 五老
 杜厚
 可笥
 養蠟
 つゆ

故 花

故の管さるさるし雀のふささるり
 故のさるの森らぬハ白のさ
 故のまや十一日降おのまきさ
 黄しき故の初おりて此の月
 故の枝やまの花のちるまより
 故の枝や枝まつるおにいつぬるそ
 故の枝やまより古き朝の松
 故の枝の隙片のくところの月
 故の枝の糸ハのうささ枝より
 故の枝へつらまて枝まらぬ
 故の枝平はつらくして枝さるり

無底
 春菜
 まき良
 左弁
 咲芸
 蕉弓
 霜操
 牧童
 一茶
 茶芽
 由之

願兼長

改き火

改種をゆりたる風もなまらぬ
 改き火の煙の末に鳴改水
 隠家の暮くたにまら改き水
 寂寂や細き改きのりとき
 改き火にむす打れとれ
 と玉の改きハハの白人か
 又乃く改きとくつ園の家
 改き火のまてまはれ荒か
 流うつや改き筆のこりの貞
 打のなすれ朝の改きややく務
 松にまそれさく改のさけりか

集芳
末

魯角
白旗
蒼古
耳考
係若
今
跨石
松七
外六
葉飛
世子

世の子あはれのあれたも改き水
 木さけけるをのせ改き水
 号けうすの片そ改きりれ
 改きまのまの宿の松の枝
 改き火や扇のつぎのまの秀
 改き火や地削の鳴もまきり
 改き火の中うら吼る積りれ
 改き火にまはまはまや改きの
 改にもるき洞片りたる改き水
 世の中一のまのそ改きのうらま
 改きたぐりりや改きつだれて

成員
ノ且
年人
又積
可教
蓄三
不零
塊前
氏陵
号笠
申高

改を子

改りしものさすまのちる摺水
 奔りの暇をたてまつる風を
 起されても傳ふ秋の改を水
 十又夜のいよゝし改を水
 きてこのせにやうむ改を水
 改を火や舟のあちうも人の伝
 きとらん花の枯枝を改を水
 うかこのまを返たる改を水
 月六あゆみのめりるる平りうれ
 春中平心入り控れ改を水

一茶
 春隱
 秋夫
 憐霞
 夜來
 林園
 鬼洞
 而
 共欣
 天
 順丸

管

管火やまのさやうね橋の素
 管美すじの改中改りうり
 尋のうへ尺吹るく居るる水
 追れてらんたうく居るる水
 物元の神の素直く改りうれ
 飛や管多人を訪ふ改の素
 けら松や竹んく改りうり
 やあつて橋をさす改水
 出逢て改りうり改りうれ
 くれくや管素たれ改水
 くれ改りうり改りうり

柳飛
 管甚
 今
 管
 管
 管
 管
 管
 管
 管

題義夏

耳三三三

そのちやう堂を渡り居るは
けりも世のまゝ花屋に
薩の考れけりみちより花堂
堂火や雀の家の中けりけ
この端れやも堂もあめか
心法やまのふとけり) 堂
おりるう水うらけて花堂
抄のいぢけり外もつまを花堂
枝木の考買十んで花屋に
はふは返てまれ堂をつとけり
こゝれ堂で構え居るは松の版

一巻
大阜
道亮
乙二
今
夢
氏坊
奇劇
木海
魂前
寛松

題叢夏

花屋に居るは花屋に居るは
打の考れまひつては花屋に
松枝の紙より考て居るは
追子の堂とりや小松をう
たんと考ておとけて追子堂か
まれまにまの言する居るは
まのいまや堂もこの考の白
けり堂とり人の考をうら
こまやうに考ちりり考りあ
石の火とりまもあゝは花堂
考のたゝ火の足は考り考

魯原
花屋
長高
考老
白人
蕉白
玉屑
一茶
権剛
丑侯
方以

世乃つとてふる定に世風す
 るのどくく泥まて来てり世
 祝も新しそ見をて 初 世
 ひくかり新ある事の量り乳
 津書の唄も量た有ぬか
 松風のやうに居るのあへり
 花雪ちひさくうてあのぬき
 存分に量たやと来りり
 霞のあより量と来たりり
 雷のあよりつる之花片りり
 雪火や花子れあもてあき

萬尼 石
嘉 湖中
女 與人
花 其成
花 振翠
花 仙風
武 南曉
武 國村

きてれハ折ちりりまの量り
 押谷ぬきりに居るの光り
 居るまき春の百のちぬきり
 研なるまも秀つる花片りり
 ちのちあをを義にまてつる量り
 りりあつるその花よりつる量り
 子むらやあつる居るこの量り
 性るやうに居る花片りり
 承弁の松の下かゝ量り乳
 笠の左にや折く取て花片りり
 心にむすよのあり花片り

出 如友
花 北尼
花 東陽
花 賈天
花 白掛
山 春城
山 三有
山 橋栄
山 黄心
下 觀平

題叢長

編 幅

子のまや世の中よりと塊さき
 塊まうつめさひさよふんか
 横の戸やまふ人ありて塊の花
 葉まの塊ほふ氣や羞くし
 糸まをさふ人とわのまふ奔の塊
 おふにもあふ塊のつりか
 汗中やけをたひよてまの塊
 幅幅やむりしの糸の塊 一
 うらりやふんれあふりまをさふ
 塊幅やむん人の女房こちをさふ
 塊幅やつにほさふのまふれれ

一茶
 雪焼
 小元
 菱言
 杖長
 有衣
 立志
 薙左
 曉若
 菱村
 保吉

題 叢 爰

塊幅や故巻をさふまをさふり
 故巻を故をさふまをさふり
 塊幅やえん世に在る号
 塊幅や登とさふて人たふり
 櫓のまを塊幅にさふれり
 塊幅の拵え料にさふれり
 まりて塊幅の世まふりり
 塊幅の流をさふりり
 塊幅やわのれくさふりり
 塊幅の拵の拵にさふれり
 塊幅やまの拵にさふれり

元 諸 九
 善 三
 素 卿
 月 仁
 一 草
 送 亮
 一 茶
 塊 翁
 井 眉
 曉 翠
 美 沙 支

岸より舟尺ゆらりゆらりゆらり
 舟の花をきき出りきききき
 白き花のくも霧あふむじきき
 橋の老くも霧あふむじきき
 村の舟小舟あふむじきき
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧

舟 尺
 舟 花
 白 霧
 橋 霧
 村 舟
 舟 霧
 舟 霧
 舟 霧

舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧
 舟の舟あふむ霧あふむ霧

舟 尺
 舟 花
 白 霧
 橋 霧
 村 舟
 舟 霧
 舟 霧
 舟 霧

打の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野
 久の書に自ら左廻りて野

魯隱
 姜子
 月犯
 羊角
 櫻子
 蕉白
 井有
 竹笠
 護物
 三序人
 于愛

灯もやはそんぼつそんぼ
 田のそんぼそんぼそんぼ
 不た刈圃そんぼそんぼ
 少のそんぼそんぼそんぼ
 田一枚まらつてそんぼそんぼ
 久のそんぼそんぼそんぼ
 誰やうそんぼそんぼそんぼ
 家もれつそんぼそんぼそんぼ
 叩くそんぼそんぼそんぼ
 乾藤すそんぼそんぼそんぼ
 鳴るそんぼそんぼそんぼ

漫
 素
 釣
 菊
 永
 採
 詠
 徐
 應
 二
 確
 人

移川

二つして感もるもねとみまか
 まつたたくくみちをたむのよきま
 波ののくみちをたむのよきま
 光たりのみちをたむのよきま
 まくしてみちをたむのよきま
 けりて移れぬとまわぬも泪か
 表の移のうかまをたむのよきま
 家近く移のあり度くたぬか
 心川と湯まてて下る移れぬか
 赤やや移とのれたる魚波し
 老なりし移れぬとみちをたむ

子威
 今也
 春思
 古竹
 柳花
 霞
 霞
 霞
 霞
 霞
 霞

移の川に魚より遊ばず
 移の移れ移道なる九月をた
 多る波の氷にたむく移れぬか
 移の波の能てたむく移れぬか
 移の波の能てたむく移れぬか
 一方の移れぬとみちをたむ
 海はてぬかたむく移れぬか
 ちりてたむく移れぬか
 うの川に波のありてたむく
 可き玉のありてたむく移れぬか
 又波をたむく移れぬか

花縣
 共六
 柳花
 瓜
 瓜
 瓜
 瓜
 瓜
 瓜
 瓜

の舟りや大なるくといふや
きちる千粒うらうらぬの乳
うき人のおれ火とたけりあか
臣情 塊にえもくくみれ
うき人のやれをえり人の親
うぬもろいことあれなり小夜
うきまきうは是れはあはれ
りの舟りも人あはれうらな
括るれ一咽忘れや舟中の心
と風やまきとえりうらぬ
志はしんせりやうらぬの雲

恒丸
舟六
一磯
午八
乙二
瓜
一草
瓜壳
養乳
養子

風ありんをよそよそ火の巻跡か
舟の世と舟に食らふうぬか
やまよそもわらうし鳥かきうぬか
う舟りぬハ茶の川一辺か
若松ものりりりりりりりりりり
旅く鐘の鳴返むうらな
成るうれ使さく人れかぬら
杖子に揺めわてきうぬか
うき人の子やうらぬの舟りん
よきふりて筆の舟りうらぬ
ふ子あるすのうらぬわらぬ物か

瓜
真々
茶葉
杖中
少少
一茶
雙子
有斐
兩隣
吐風
茶古

麻の子れきふんをくち敷の夷
そのれをたふすにすゆく麻子か
子やうくも麻子さるる穂よん
りうけのやをそはるる麻子か
旭の弁はけしはわかるる麻子か
地まじしすのそふ葉を麻子か
麻れりの吹過せりし道か
芋の皮にれくろく麻子か
まき芝にけりぬる麻子か
素の夷にけりぬる麻子か
んりしるる麻子か

吉川
眩丸
道亮
奇剛
乙二
茶丸
養子
蕉白
桂子
玄壇
麦左

〇九三

夏 麻

悠 射

大 岸

題 兼 夏

すくろく麻子か
まのそれく麻子か
かし節をすそれ麻子か
麻子か
疾をけりぬる麻子か
よりすく麻子か
折角とけりぬる麻子か
急らぬてあま麻子か
子孫すまて忘れぬ麻子か
親ハ子れ子よりしる麻子か
曉ハ出にぬる麻子か

可磨
微風
甘谷
一葉
養左
保吉
士助
暹丸
寔松
漢物
葉更

喧嘩の喧たさる人又月日
 川流るき城のすまふ又月日
 又月日やあるあひそむ松の月
 又月日や折りしある竹の枝
 及初に降あしり又月日
 くれあひてふさるるささ
 又月日より史志人とありたり
 過るるや友漫とく又月日
 又月日れ折りしあるあひそむ
 又月日ささの、嘘さや又月日
 この城さささといふ人又月日

喧嘩
 会
 美左
 樗
 仁権
 会
 梅人
 保吉
 莫二
 又明
 存臣

又月日や靴のあけたる人の良
 又月日や吹流るるあひそむ
 又月日や藪の雀の鳴りさる
 又月日る南天の衣のささる
 又月日るや折より落るあやも
 又月日るや梅も様も又の子
 又月日るのさささいさねの歌か
 又月日るや枕を捨るあひそむ
 初らハサのさつじ又月日
 号れまきささるあひそむ
 又月日るや枕さるるあひそむ

松見
 恒丸
 会
 士
 会
 王
 電洞
 長
 芳角
 樗
 栄兆

起郎の心老かりぬりる
 ぬりるやととてりきくえうら
 ぬりるれまのあまもさうりたり
 兼古の身ハ老なるりぬりる
 さうりて中たふ交の橋うれ
 ぬりるれあ子さひの本もたのあ
 夕暮るれさうりくもさぬりる
 さうりしと子にぬりるぬりる
 春るれぬりるぬりるぬりる
 ぬりるもさつる悔り小盛
 ぬりるやあ向の中はゆりら

丈方
 甚感
 少冠
 女侍せ
 成貞
 瓜
 完来
 年人
 可超
 今
 不寒

ぬりるをわのほるくをぬりる
 ぬりるにうのさや松をぬりる
 ぬりるも漆にうりぬりる
 ぬりるや言花足てぬりる
 ぬりるれ花むりぬりる
 ぬりるの是快もぬりる
 ぬりるや森のうちやぬりる
 第一のあにるりぬりる
 ぬりるや人ぬりるぬりる
 ぬりるれ花てたぬりる
 甚感に白ゆぬりる

月飛
 今
 道亮
 今
 乙二
 養比
 岳路
 羨
 一子
 申
 無原

生舟や朔に計たれぬりも
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ

核也 一桑 尾全 骨全 雀句 武陵 舟池 實松 對と 新舟 志宇

ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ
 ありとも大木にまをさる左辺か
 ありともや枝の鳥のそとさむ

後又物 竹枝 菱豆 不轉 梅間 双鳥 吾岸 海向 東高 宇相

寒の戸やみりるるまよふ大机
 ありもや糸のこころのふりち
 若うし降ししきりありる
 他の子あうるちりぬありる
 入りもや位果ぬ身をまはる
 入栞たひま鼻返さるる寝か
 美大してまなされたるつりか
 秋葉のたあく赤き入栞か
 とろとして入栞分りし香煙か
 栞るん後し互に足ゆるく
 栞る養ふま刈り懸ひらつ懸り

吉良 岐東 碩高 力裁 左弁 白権 保吉 祐昌 足直 道亮

梅 雨

入栞時平襪つてぬつもきし
 大船を見にあら入栞たあうか
 走置もやれりりさぬありやま
 人のり道はあうくありり周
 入り言涼しくたりるの鈴
 まうくと毛毛つちりありる
 入りるさうりしうけるゆきか
 つれにこりて来りり入りる
 心あをに見るる懸るり入りる

梅 左 乃 孫 金 阿 我 双 明
 権 左 亮 童 院 量 少 鳥 権

梅 白 雪

入 力 同

入 力 同

題 義 真

満月代出ても短詩更次うれ
 短歌といへつるさぬ心の結
 是れとて短き歌や考つて
 けりてやその短さもあはら
 短歌は年の風流よりなり
 短歌は春をきて暮るる夜の美
 短歌のさむけをより考へ
 短歌といふ心はけりなり
 短歌はや春の情をうしせん
 こゝろは跨よりふくむのこゝろ
 短歌はまればとよりのけりなり

申高 美郷 武陵 袁丁 一葉 旦菰 陽光 茶梅 美敬 十作 其出

短歌をば使うて笑ふ松をよか
 止ぬのわがのやうに短し歌のそ
 るみうらな歌も短しとせり
 短歌をば抱てむるや花のそ
 短歌はうらな歌のそり 鳥
 短歌はうらなとよりのそり 鳥
 短歌はや菜陽のそりにけり
 短歌はやそのそり 鳥
 こゝろを志つるのそり 鳥
 短歌はあやめ草の朝より
 短歌はあやめ草の朝より

車馬 兼犬 久城 免落 香風 梅所 可考 岐山 荃市 几董

短歌

題叢

友の月を弄れてみてもよのよ
世忘の風をうらり友の月
杉ととみそをうはれ友の月
白鷺のふき立てをうり友の月
新くくと人に六訓て友の月
友の月人をさうとむんりし
はしたるくくささしたる友の月
友人に五助とせん友の月
友の月流流鳴う流りり
芒穂てまつらんをう友の月
うらハカしてあれハカし友の月

五管
標堂
公
華伯
朱英
公
見直
完来
年人
可如星
道亮

いれどくは情もやすん友の月
杉書の根の風をうや友の月
傾くと海をうはれ友の月
心の井に聖をそのれ友の月
友人、心まうれや友の月
友の月をさし出さすま本木か
懐の中をさしてせ友の月
友の月や友の中をうて友の月
友の月井の突くも佳うある
友の月よりをうたうる友の月
あはえらあはせさう友の月

公
力流
公
乙二
公
力化
冥こ
奇剛
長統
魯隠
支榮

老よりれ伸する是も故原の舟
たつとを言れ自さし入る枕故原
こころをれ悔を言さるる自原か
寐て吾れはなれば多う悔の内
物息も又息も未を悔の舟
故原の自は自の小風花よか
自は故原に墨てそろりこ出にそり
引よをそ松をこしそり悔の枕
へたれはかのこまろし悔の自
あそろり故原も人の深とか
悔の自をそ入るもかろろり

春の
雲に
旅の
眼丸
有と
長翼
樽を
今
丈方
完素
年心

白の原は故やのもさうのろろり
悔はつらう一隅をね核抱
悔はつら世はこれまてと寐たれ
悔はつらこころはつら心
人の才も業にすむ世や悔の自
うつらわうそらや草木のなろろめ
り枕の清れはつらの白ひか
山の日のたよりうくさる故原か
舟をそ入るや故原つらそむつら
笠の戸やつらもろろり船のそ
悔つらは因烟をそ入るゆ

か
白柳
九尾
岳路
梅僕
等老
斗介
幽嘯
奈剛
三浦人
戯員

情つらねをうりもやしん心の歌
あうらもせうもあうら情の風
あもふもひつたあうら情の
つすれ了らうにわさるる月夜が
酔いさや情たうさるる心の
まうくと情約よるうらうれ
故やたれて戸さるる星の月夜が
釣初て遠へて見たり情の中
業平の知てあうらうら情うれ
永莽のあうら情うらうらうらや
人持にあうら情もあうら情の

文角
麦左
秋左
五左
古左
桃舟
子記
陰水
菅左
今
素丸

紙 帳

惟 子
おりしるい言やあうら情にま松あ
養本にむとてうらうら情あ
松凡のひさきさるるあうら情うれ
惟子れあうら情に男あうら
惟子れあうら情に鳥やうら
惟子れあうら情に人れあうら情
惟子や凡のそあうら情の上
あうら情のあうら情の画あ
惟子れあうら情のうらうら情
惟子れあうら情のうらうら情
惟子や人のまあうら情の風

其文
花好
其文
世
乙二
今
素丸
素丸
素丸

題 歳 夏

との友も情子すゝの四十九あぐ
 情子の月夜洲ま嫁入か
 情子にふらひの百の志きまき
 情子にきりく作の夜風か
 情子や帆の夕風を礼彩あそ
 情子を忘てむらゑり大観
 情子にぬぬ情子すし親の政
 情子や姉にかたろおと娘
 五枝校麻子あゝりやけつふ
 こころ子や浴色あゝりしりふ
 文にわたるはなれまつりし文羽織

近り花

文羽織

道亮
 護物
 星橋
 雛歌
 秋凡
 惟平
 芳高
 平馬
 不知名
 平人
 几童

そのふれ梳立佛し文羽折
 古井もそよけあぐし文羽折
 川越にあらけん余ひく平の
 篠形にふれて信し文礼
 母のぬや世の人美れの文礼
 神楽の美草に好む白麻
 晒衣らむ立やすしきまふ左男
 こころ子にまゝりいしりし晒衣
 子に厚しと晒衣搥くぬぬり
 空母のおももるる晒衣川
 旅人に常りけり晒衣搥

晒布

尾物

完全
 芙蓉
 風角
 又明
 長翠
 白麻
 初雀
 花左
 橋壺
 護物
 左足

一夜酒

一りの足りあつたせん少 汗

三島

ひあ海も華のそいつ時

道亮

松風とる名もあらんひあ海

栄修

祇園去

九月降ノヤ人等起つてつらつら

栄甚

旅運去や美着る原も風薫る

甚市

為いすの足すそいそ降の足

几重

旅ふそいそあれに降の足

大江凡

舟よりれ最に足せん降の足

表蟻

旅運去や人のあ中りあつ

一字

旅運去やれつたよる名やん右

道亮

つられに起つてかゝる埃くれ

尺笑

旅とつて旅運去あしとつた

豊権

あふとつてつらつら旅運の入りか

文角

有姓の運去つたりや旅運の去

雁赤

嘉定

十六騎宛去つや嘉定吟

寛左

子母跡といふれに足れ旅運の

護物

坐頭納涼

りあをなつて坐頭の子さか

他力

旅とつてつらつらとつて坐頭運

道亮

すしりや旅運あつたり坐頭運

出伊支

富士訪

月あつてやいすそそ不長きし

風水

流るる心あれ打あつて不長訪

芳来

そいれつらつらとつて訪

庚来

題叢夏

鞍馬代 鞍馬のたれ教も入るはしりて 女 湖 凡
牛代つきの夜明と道せても 女 一 痛

半夏生 田舎のい運速の足力も交生 流 舟 子
西折の藤たぬ鳥も交生 宇 橋

玉 用 よく足力も交生 保 吉
舟宿や玉用の入を吹くは 一 草

中 干 中干の干物後 屋 且 道 売
母人の振袖見たり 古用干 武 待 半

揚の書は屋もさう 古用干 雨 更
中干やうつらんは 凡 律

中干や世にあら人の若さ 百 助
中干や奔りに久しきおとろ 白 旗

夏 日 夏の日もさうまひて 武 陵
夏の日もさうまひて 武 陵

夏 日 夏の日もさうまひて 武 陵
夏の日もさうまひて 武 陵

夏 日 夏の日もさうまひて 武 陵
夏の日もさうまひて 武 陵

夏 日 夏の日もさうまひて 武 陵
夏の日もさうまひて 武 陵

夏 日 夏の日もさうまひて 武 陵
夏の日もさうまひて 武 陵

題 叢 夏

大津島に丹のさたる黒か
いづかの乱て黒きくよえか
り此かの字を黒きま落りか
りゆりの元と職をあつさくか
端を以て書き子を遊る黒か
の黒く古にきくは皮
松はまは落て地にたつ黒か
黒りや目をぬれたる布の端
ふれよれかふく又黒き光りか
黒りやとり集たるまは
黒りや小庭の松に遊り

公 曉甚
白 旆
芒 村
公 臣
弘 臣
風 律
保 吉
祿 昌
士 郎
公

大塚の夢をありく黒か
黒りや折りく拂山是の砂
黒りや人の扇を二本か
火を焚て黒くしつむる黒か
黒りを押し去つて黒く基の上
配強に女の多き黒く
牙ひらけ黒くをさかれば
つづくと人に遊れぬ黒か
黒りや中よりりりりりして
黒くもぬれたる黒く
黒りや万念のなごまる黒か

公 松
木 儂
憐 氣
赤 葉
完 素
布 杖
可 菴
瓦 全
月 在
末 樂

是りや立寄る處もろくしの木
吸込人人の名是きりけり
是り此眼を休るる者りね
日暮もよそよそ人まきりね
是りや多にきてみる嵐も
折りもユズをうつる是りね
むらうしや是と人のよにきて
是りや考情の跡に居るは
是りや大層しやうしたるを
とそふつてもあつたよのそ
影のまを砂屋もあつたりね

雪権
平角
瑞子
白塘
卓池
籠啄
史子
白鳥
求古
とと
古徑

うゝ森のさむれかみの是か
是りやんすきそハ風のう
十人う十色に暮るる是りね
是りや命さげあはるの上
是りや火桶足てあはるりか
是りや中井おりのハ海の上
是りや角力よりあまの舟の
是りや天や魚へあまの光
是りや天の白くは吹海の日
是りや天やんをこむ管の光
是りや白鷺をいさる牛と

雪権
平角
瑞子
白塘
卓池
籠啄
史子
白鳥
求古
とと
古徑

題兼長

夕夕にききとて白く遊ぐれ
 夕夕に打もみ切たる中
 夕夕や只一打しに中
 夕夕やみりもわき人
 夕夕やつね取の人
 夕夕やまををつつむ村
 夕夕や流出たるむら
 白百にその昔も鳥はうり
 芥の青帯の置ハ夕夕
 うらや夕夕たりてまをうら
 夕夕のまもみりたるむら

三味人
 夕夕
 焼甚
 百
 益村
 会
 白
 尾
 保
 会
 夕夕

夕夕や壘うらうら
 夕夕や雀ホリるむ村
 夕夕やや夕夕の暮の松
 夕夕や取て火を焚藪の家
 夕夕や世は是よりむら
 夕夕やまをみりたるむら
 夕夕やつね取の夕夕
 夕夕やつね取の夕夕
 夕夕の夕夕も夕夕の夕夕
 夕夕の夕夕の夕夕も夕夕
 夕夕の夕夕と夕夕の夕夕

梅人
 悠
 祐
 士
 米
 可
 屠
 一
 長
 道
 岳

夕立のすけやふれ深とひやく
夕立や電の上の是いそまり
夕立のかりはむら火煙か
夕立の光は月のり板くれ
夕立の森に珠をと達の上
夕立の長橋をさる男くれ
夕立のてをうた夕立をうり
夕立れき吹さうく板くれ
夕立のこまうんちうぬそん蟹
夕立のこて人すむ葎か
夕立れつうとちるや年の古

乙二
赤紫
夢
武成
奇劇
電槍
一葉
幽情
巾被
鷗史
一蕙

夕立や電のさふおくれき
夕立や人も木の雪の雪のま
夕立やうもをてりし時か
夕立やまをてあうり
夕立や塚にうる浮の
夕立や三つたいて着の松
夕立のそもたまちるんか
夕立のさふよりやの起り
夕立や山にうれる夕の
夕立の海見て飛るや夕の
夕立のつじふれぬれ夕の

金堤
松貞
屏風
百海
三及
虎睡
左弁
共心
一麗
雲常
左弁

題叢辰

る麻衣ののりありやや
その舞大庭前に入り
有明ハ赤やとりんせの家
醉ハ瓶のふんじりやや
吹さくを根よりしてや
とらりらりるるやや
とや城のうしろを雲が
たもくハ尺れりぬや
そ舞入りとたむ風情
そ舞ひ付花に栄えり
すじやくたのしき

道亮
会
武陵
魯隱
魯桓
会
齊人
魯也
宋既
州中

扇

おろくとしてるるりや
白乞のおろくはるりや
そ舞おろくはるりの家
そ春にあらぬきの
そ舞を舞はせとや
み春てそ鞋位替てき
こしつゆよそはるりの
流来て接子にゆる
とらりらりるるる
片を認るとは扇見
鯉はふゆあはるる

扇
和之
左志
夏身
岐東
李崇
益市
儿董
会
白梅
表竹

碎氷して半の角うつぬか
 声列のこしてとらぬりぬ
 交せりぬの片も使ひぬ
 多れて打のせとるぬりぬ
 人のぬゆしと打ふ折もあり
 事しとりてはさるあふさか
 夕暮の怨れつとるぬりぬ
 白巻て志しく是むぬりぬ
 されおて演ぬをやや演ぬ
 りの丸のぬむれまゝ田及か
 惟先り量とさうしぬりぬ
 保吉
 希言
 米貞
 瓦全
 冥こ
 長富
 一系
 寛松
 等亮
 大南
 真徳

園 原

舟子れうつれぬりぬりぬ
 り多やぬもりけと吹ましくし
 け片や夜もぬのさくしたき
 心申やぬれのさるまのけりり
 船りの心志つけさぬりぬ
 羽りし打ふりもありぬりり
 さく浪をおまにせうとぬりぬ
 極つけの園つらんに来らうとぬか
 舟まゝぬにぬぬ画りんそのけ
 ぬて志れはさうとぬぬのさ
 うとぬぬのさぬぬとらうとぬか
 学芸
 演物
 演摩
 船中
 伊南
 三島
 六助
 兼左
 五右
 白権
 几董

題止最長

一に二度とる人のうちハリル
白雲の滞りの義をいふれり
況しのうちつとる中死地ハ
先われハ昔もかちて置るハ
光珠うちより呼らり古うちハ
さのちもたやうにやううちハ
うちハわつ人の心ハおらりま
置るうちハ破るてまもやすけん
うちハうり板の敷に入れり
森起りうちハうりり光れり
うちハうりまにうとるやかの星

美葉
大に丸
重厚
必明
士位
ノ且
成員
見直
半兒
道亮
美々

河 河 裁
長 裁

うちハ居て先をよする存りル
やちて又てハ流さうらハお
のせて又るそのそをれ置るハ
梳人に深さうらハ夢ハりり
霧とけさ息やうらハ風うらま
海とさうこくして流る赤板ハ
河のよまをたれおなよの位
玉等の圃をたあしし河ねを
りけよややれさる時の光
りけよややの娘の人とらり
りけよやんとあくりす遠え

一 茶
一 茶
一 茶
一 茶
一 茶
一 茶
一 茶
一 茶
一 茶
一 茶

題義長

抱 筭

抱 枕

抱筭や夜明て月丸花芒
 吹ちけりて打り下りし筭 枕
 筭の枕買しよと云て暮人
 こけりよまるぬれ森をや筭 枕
 抱竹の歌に對して凡すし
 すしとやあ仕舞たる井の帯
 すし凡や歌にふさふさもた
 すしとやぬりりぬとてさるか
 竹すし古人ひくさるふあり
 すしにぬれ鐘とさる半の季
 すしとや滝とさるさる滝の音

海峯
 不暇
 道亮
 夢多
 果更
 菓右
 樽元
 成景
 瓜
 白龍
 吾お

涼

二三町ありふんてり子すし
 すしとや花屋の底の秋の子
 すしとや夢よのさる花もさる
 すしとや木を動して吹 羽
 村のや鶴の尾さるすすし
 すしとやと案して人の暮る夜か
 り人の座てすしき幾くは
 すしとや死ぬ枕をさる一 枕
 すしとや片よりく喰ふ歌の飯
 すしとや見るるにふさつ是の歌
 すしとやとよ夜ハ芒さるるこ

紗言
 几董
 秋瓜
 感喜
 保吉
 孫不
 今
 不暇
 斗入
 梅人
 吉川

題叢夏

十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か

可
 不
 定
 月
 道
 今
 岳
 平
 玉
 志

十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か
 十しよのきくくろく学苑か

可
 不
 定
 月
 道
 今
 岳
 平
 玉
 志

題叢夏

すしとや根筈に牛もつれれて
す凡に麻のついたるの田か
前よりて志をうきすし猿のあ
船涼や汁の美を酌る春の海
すしとや松をこり来る懶の秋
すしとや蜂のとりつゝ牛の産
すしとに依止の外未たり身は
すしとや人を見ろくは溪の泉
すしとを忘て舞ふる木下か
すしとこの多まるやその多き
すしとや昔へももももつるひ

養
公
等
一
共
身
寄
百
養
管
常

自らとらぬをうけすし垣の字
鶴もすしとられて持ふんより
きつてすしとくちうねあひの
五毛のれよりてすしとや赤の濁
赤の赤れをれすしとや人の泉
すしとに追のけもきん小田の誓
衣つとすしとくちし姉か
ん片とすし垣植もあれやう
凡すし枕屋をれると趣て
すしとや篋のあしし牛も及
すしとや小笠原の居る筈の枝

護
人
具
雲
芦
去
對
百
小
文

題
表
夏

秋のよれもすしき朝のき
よふとも志くすし秋
親の存るはこすし秋
と凡のすしして人も来
すしとやあかたは花の
小よりしすしとる本城か
すしとや老たる秋を
九月すし謹も子のつ川
すしとや旅の上にとの
すし凡や泣きれんも
みら秋ハ一秋屋の風すし

春哉
女きよ
扇是
夢南
典人
百寿
路丈
瓦路
不道
環
送杖
陸奥
崇石
乃波
黄華

秋 涼

すしとよほて実をや西
洲より来てすしき
すしとんちもささくや
本々に鳴きや涼
涼しとやと鳥と人
すしとやいぢさく
涼しとや小笠の
すしとや夢あうち
すしとよとあつ
今桂の
松の

李尺
汝川
秀
抱
汶
末
秀
孔
秀
柳
代

題叢夏

力代のさけしなうのやすきぬ
藤原のうらみてもありた
人志のふらりて川原
の原に人の舞い咲にたり
才のうらみ鏡とてつた
たまにに庭をむかひて
母ありとゆふのありつた
夕十とて葉の欠を掃て
をしののけさるに涼
を凡に言のつらむす
おふはとりのいふ人

善哉
石泥
定雅
一葉
今
月化
木海
寛松
寛
常
百池

藤原のさけしなうのやすきぬ
藤原のうらみてもありた
人志のふらりて川原
の原に人の舞い咲にたり
才のうらみ鏡とてつた
たまにに庭をむかひて
母ありとゆふのありつた
夕十とて葉の欠を掃て
をしののけさるに涼
を凡に言のつらむす
おふはとりのいふ人

護物
身隠
夢
志
兼也
谷
路
月
詠
文
吾友

題兼夏

風 蕙

水 赤

夏笠に石をのこつて涼
 涼甚し自あつるを枕うれ
 夏蕙の黄火をうしつす
 風蕙をかこれ櫃ハ核りれ
 風々々るれ蕙の地々るの位
 橙のうるまきや凡々る
 凡々るる多や鞠場此蕙位
 暖やあつ見ゆれ凡々る
 揺るまきも涼しや門の月
 管素ぐくよそあをすれり
 二人をむすへ濁る位あか

斗 圓
 伊豆 雪 籠
 保 言
 寄 桂
 今
 道 亮
 乙 二
 一 葉
 金 花
 五 木

石工の鑿を冷したるうらわ
 境のすむ敷さへ見せしうらわ
 心吹れゆ花さうしうらわ
 撥多村の蕙を流るしうらわ
 一すれ天てりゆしうらわ
 ハ九万若き見とるしうらわ
 主あをて見て追はるしうらわ
 抱む人もあのおくわしうらわ
 けりりとい一本ありきしうらわ
 晴しやほろのそくあつるつ
 主あハ物ねらよるしうらわ

瓜
 鳥 麻
 凡 蕙
 瓜
 頁 明
 左 明
 涼 城
 蕙 左
 白 旌
 石 燕
 五 明

題 蕙 夏

時めくや佳ふれ初の小栲干
常此巻巻をちりけしうか
そふめハちこあつらへしうか
ひやくと田んをしり込しうか
石を押しに風の空ふり流しう
そふれにけしひつりのしうか
人も誠いふれ下しうか
常携てつれ借したるしうか
表裏に表余れしうか
佳ふれ心表れて色ねねれり
新ふれり案にふれしうか

恒丸
士郎
栲干
榮光
完来
牛心
喜半
尺丈
長高
菱高
栲干

たまたまちりちり力ちり佳ふれ
表りけと見とけりしうか
君り代の心のけりしうか
は佳ふれ酒ちりしうか
半りのハちり佳ふれしうか
松見とちりちりしうか
ひよろくとちりしうか
ちりちりちりしうか
批の表のちりしうか
人けのちりしうか
終ちりしうか

常笠
巫陰
幽嘴
三層人
万和
漫こ
久威
寺ヶ
小尼
湖中
葉嶋

題叢夏

晒 井
 巾きりけいんははらうの田の月夜
 びすふもはる良ききくろく
 松の木に海老達の居るしうか
 るのしう沈む松葉の石にうれ
 體の毛の融しうちしうか
 とははらうはりきんの澄さう
 白きやしうのそけひうか
 晒井ややしつかりてうの青
 けり井や赤夏うさりのけり
 晒井やすしきうのそけひ
 さりる平んすし時をれき

松は 双鳥
松は 養嶽
松は 寛兆
松は 方壺
松は 桃杓
松は 左勢
松は 百明
松は 蒼左
松は 寸車
松は 故技

麻地酒
 心 方
 ううそく平教くめんはる麻地酒
 ん左きうしせん流に三千土
 ん左海へかきさ遊くへー
 海天ゆる筆にきくられん左
 ちうう井や小魚と持しん左
 かなり冷やあがりれん左
 余とちききううんやん左
 けあうりやうの足てあるん左
 着るふ十浮へる塵をふしき
 着るふにうつて時老の良
 宗澄に着るふふ大長うれ

松は 一振
松は 蒼市
松は 吐月
松は 長高
松は 一葉
松は 寛松
松は 宋年
松は 著記
松は 几筆
松は 蒼市
松は 瓜

題讀頁

瓜

世譽てのじ著るものよりか
著るや葉疏よりつるの上
瓜を抗や瓜のちるまで
瓜の口に先ややかし瓜
人來り地になれん瓜
非玉く自一時や瓜
柳 瓜のちる瓜入道明さ
冷汁 瓜のちる瓜入道明さ
瓜粉 瓜のちる瓜入道明さ
瓜 瓜のちる瓜入道明さ

李 李枝
車蓋
菓古
廬風
一葉
琴二
米英
菓十
菓十
菓十
菓十

冷

物

瓜粉やきんぐ 夢宿の松
差控て月とすのちや節の
干飯 干飯や宿さや節の書
梅干 梅干や梅干片て一巻万
香需散 瓜のちる瓜入道明さ
菰 瓜のちる瓜入道明さ
漆 瓜のちる瓜入道明さ
批 瓜のちる瓜入道明さ
揚 瓜のちる瓜入道明さ
李 瓜のちる瓜入道明さ

推己
道亮
今
橘中
芳角
瓜
瓜
一葉

題叢貝

林 檜

百 日 五

差 如

鬼ころの鬼に喰らすすりくられ
 つりくとも月夜にうりし月んこお
 ちれハ喰くくして百日後
 喰まきろふ日ぬれたるりくれ
 とろ子入り秋に名のうつろ
 六月をふつしめま百日後
 菊は並ん糸の煙や百日後
 百日後百日後も喰ハあふれし
 三日ぬのはしれんたり百日後
 身残る日をたさやさる子入り
 濁ろくく差柳 差ふる日ぬれ

鶴老
 朱良
 女子代
 百 欣
 八 欣
 臣 光
 完 末
 美 宇
 秋 末
 嵐 飛
 百 欣

文 柳

差柳のち所さる白灰や
 差柳に火のりる指ハ穢跡を
 けしきく秋風らんき差柳ハ
 骨も小所も志る文 糸

白 確
 丈 左
 菟 左
 白 確

凌 宵 花

凌宵花秋の風ハ花見や
 凌宵花秋の風ハ花見や
 凌宵花秋の風ハ花見や

道 亮
 臣 光
 完 末

恙 姑

恙 姑
 恙 姑
 恙 姑

柳 起
 吐 力

河 骨

河骨
 河骨
 河骨

吐 力

題 叢 夏

菱

花

河身や風江をまよる船
骨蓮や枝下り白くとり
つるの葉を抱へて咲
六月大なる子平りの心
白ややちりふちるひの心

を

相翠
美亮
蓬
鏡
其爪

萼

葉

ちりハちる若れ海で力清し
ちりハちる若れ海で力清し

海

不
壞
其爪

菡

花

ひしりハ若れ菡の心
菡の心や雄鉦子の心
菡の心や雄鉦子の心

伊

張
李
菡

交

子

交子やさすき道あり
交子やさすき道あり

交

交
交
交

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

瓜

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

保
保

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

交子に播多の町さうさ
交子に播多の町さうさ

士
士

題
兼
夏

夏良に鶉の此角をぬきぬき
夏良十親のふとまじしらぬ
夏良にゆく藤の人を松の陰
夏良や芋火焚家にとり付て
夏良此ふて足らぬ八重巻
夏良とふれんとまのたすく
夏良のふにちるる一山ぬか
夏良やふもたのこし垣一色
夏良此指と巻ふつ巻さか
夏良や家より老しむのその
捷ふやを風とまじし捕片しよ

又権
きせ
白柳
道亮
一子
岩淵
桂巻
万和
兼親
右権
湖中

夕 歌

夏良十万言り取の塀の上
夏良ハ巻すふてちるる
夏良や梳のふじらぬ 良
夏良や花にりさぬ夏の人
夏良の巻にひるる一子もや
夏良に息吹ける木陰か
夏良やふの舟にちるあれ家
夏良のふや洋なる字の中
夏良やま帰して樽の壺に
夏良や裸て腐る人の影
夏良のふとむらう雀か

夏山
美穂
龍崎
野春
若友
典路
松江
左舟
守藤
今
院甚

夕良のふ立とれそむ此 堀
 夕良の指やつ田の海月と
 夕良の花うむ猶や余浜の
 夕良や花に嵐のそりすし
 夕良やふのこめそ極さし
 夕良やひくしハ蟹も白りし
 夕良もこれむふの舞か
 紫杉けハ夕良ハ氣急そと
 夕良やおちつらけ割木並に
 夕良やまれ這てさつ門 延
 夕良や今に白くを改めん

今 蓬 古
 芒 市
 百 由
 百 燈
 馬 秦
 岱 吉
 今
 甲斐 末 里
 信 芳 松 後
 大 江 丸

夕良や畑て有さうした人
 夕良の花のあさうの料理か
 夕良のよのハき眠にまきさく
 夕良より夕良端しふり巨
 夕良や余浜のをちる猶光
 夕良や岫のそきの位をさこ
 夕良や崖の房の蔓の中
 夕良や活をさくハ戸一枚
 夕良は夕良れ花にくりくり
 夕良は夕良咲かすの上
 夕良や文をそむる垣のふ

存 亞
 誦 六
 長 翠
 木 僊
 葉 光
 米 貞
 方 有
 午 人
 完 末
 岳 輪
 松 守

南瓜	甜瓜	沙瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜	瓜
南瓜もひり落りたりと粒はハ	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉	瓜はさるに中分ちるる瓜は葉
木	百	百	百	百	百	百	百	百	百
儂	儂	儂	儂	儂	儂	儂	儂	儂	儂

夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏
夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉	夏はさるに中分ちるる瓜は葉
夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏
夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏

題叢夏

怪

毛物

孤

魚

虫

吾指ふたひにのり 若の音
 遊るうも分ふをををの音
 怪の犬や黄州あるの溜りあり
 控の本良地もすまをあるのり
 著しくたはは八捕のたうりあり
 ひとしまた毛虫とりつこみか
 物寄れ毛虫落るる木下か
 これ所とむす枝えれ毛虫か
 砂系や竹のいそたり毛虫
 松風や葉中のうら遠く毛虫
 赫西羅孤魚のり素々光来れ

志共
 如柳
 窟来
 何れ
 困更
 几葉
 都雀
 又左
 一蕙
 可花久
 乙二

航

川

物

金龜虫 草むしや長者やまのころね也
 航とれてそそり夜中のつ
 航荒て航の幸さや航のうら
 世の尻にさるるもくは航の航
 つ航の揚やも力ありん
 川物や繼の徳い百の篠
 川物や糸と引し糸の糸
 川物や罷も必竟せりその
 番りらふ航はしめさる航は
 何物れはめりやむら木立
 何物れの尻投也む葉か

茂秋
 若お
 道亮
 護物
 玉芝
 白龍
 保右
 大江凡
 道亮
 一葉
 管葉

類叢夏

小 籟 へのかや柳ふかき故にあり 月房 葉葉
 籍 鈞 つゆやの境より来る不情葉 藤人
 海月取 籍を押しもかきさるるを折 白鐘
 伸 籟 伸籟玉をとりていさよ 曉葉
 後人の凱陣よりそ伸 籟 葉
 子のみた動をさけり伸 籟 村江
 児ありて風の笛もさるる 白鐘
 葉をその庭や葉の小葉さ 道亮
 白花しらぬ帯ひやま 葉 長島
 乙松やこゝし葉の赤 葉 一葉

祭

交米樂 探りに非るなりまを交非系 久藏
 日折使 葉葉の折目すこゝるま使 律大
 多白きれをり使やま男 葉 芥多
 葉 葉として命折まの既後か 樽元
 人きて歌見くさるる既後何 葉 葉
 本位に又まをりつ既後何 人 葉
 葉のちの考やまをりつ既後 葉 葉
 けくまをり既見てさすは既中 人 葉
 たふんつゝの流も葉も既の葉 白鐘
 蓬見まをりまのまをり既後か 葉 葉

題叢夏

笠のふれちりもはげのりふふ
 是様してまや花色の狭うれ
 牙にさる草をさし折てはげか
 芒ふ心道の出来さるはげか
 酒後もある草をさすはげか
 涼くはやぬまをもよはげか
 是様とまをほしやん小の月
 是様して見ぬまのまの葉の葉
 是様かま七くも様も様はげか
 打築のやうはげさくはげか
 光信ら通にまをさすはげか

松見
 士郎
 瓜
 芳之
 葉葉
 昔之
 昔之
 瓜
 瓜
 一葉
 出嘯

崎のころは造る花うめ 妓
 是様してまをさすはげか
 涼くはやぬまをもよはげか
 是様とまをほしやん小の月
 是様して見ぬまのまの葉の葉
 是様かま七くも様も様はげか
 打築のやうはげさくはげか
 光信ら通にまをさすはげか

二序人
 去曲
 有斐
 石海
 白泉
 双湖
 白尼
 漫之
 様豊
 一葉
 感書

川 社
 拍子に魚のようなり川 社
 有底にあり節とやの社
 秋代や男女のしとや 様
 秋代まをさすはげか
 正衣大匠を先へ着た編か

題正義夏

子をつれて著丸編をさぐるまぬか
 二交月をさぬ(むけ)る著丸編か
 あらるゝんてわけるちれまぬ
 ぬらつゝ交をもわけれたれまぬ
 百やちのまをいし人のと
 志しらぬ彼を合れたれまぬ
 至極是て松丸に狗の邊りか
 交の交を是す毎日の枕りぬ
 馬ちくや至極起をハツヤリ
 交癒の丸家骨揺る極是か
 交癒下訓て夜の縁にけく

大江丸
 方あ
 可歌堂
 不寒
 乙二
 岳籍
 保吉
 釋忠
 道亮
 寛右
 表次

交瘦ハ男らしきちくろくろり
 交瘦やけを笑約し自本様
 交雲様心を出ぬして交のそ
 交のそを風白雲と飛たたり
 交心の白一色に霞にたり
 交の心つり刺青とやろり
 交きの夕をさす帯心か
 交に余りてさる交の心
 交を和しちる魚さる交の心
 交心を見て立あらんか
 交の心大石片しとあめり

存亞
 松清
 舟人
 馬頂
 保吉
 不也
 姫丸
 舟員
 菊三
 南心
 源次

類義夏

夏 海 文の海一海つゝの荒りぬ

夏 批 星

夏 文の海入也つゝるうりりり

夏 五 壺

夏 文の海入也つゝるうりりり

夏 井 六

夏 文の海入也つゝるうりりり

夏 菖 三

夏 文の海入也つゝるうりりり

夏 諺 陶

夏 文の海入也つゝるうりりり

夏 表 旌

秋 近 秋止まり旅のうつりりりり

秋 嵐 六

秋 近 秋止まり旅のうつりりりり

秋 平 角

秋 近 秋止まり旅のうつりりりり

秋 護 物

秋 近 秋止まり旅のうつりりりり

秋 澆 平

秋 近 秋止まり旅のうつりりりり

秋 雨 考

秋 近 秋止まり旅のうつりりりり

秋 兩 考

題叢夏

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 水 鳩

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 保 吉

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 恒 九

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 葵 三

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 大江 九

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 可 勢 望

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 標 壺

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 米 英

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 菖 三

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 喜 牛

晚 夏 交采や馬にうりりりりり

晚 道 亮

入直の嬉しき友と知れり
山樞や古まわりの友と
そりりくまにするゑも此岸
あたりやうらまゑの友
友めくや権を本法の料理の
夕暮ハ友のものの如く
村るハちつとをまれと友ハ来る

瑞馬
寛松
古卯
鏡啄
確金
惟平
方解



